

寄稿

## 浦和大学社会学部現代社会学科の開設に寄せて

—「実学に勤め徳を養う」の新たな展開へ—

副学長・新学部等設置準備室長  
大久保 秀子

久田有理事長・学長が今回の改組に対する力強い方針を示されたことにより、本学の次の20年への新たな挑戦が始まった。

2020年4月、本学総合福祉学部は社会学部へと名称を変更し、総合福祉学科に新たに現代社会学科が加えられた。この改組により、総合福祉学部（定員200人）で出発した浦和大学は、社会学部（総合福祉学科、現代社会学科）、こども学部（こども学科、学校教育学科）の2学部4学科から構成される大学へと歩みを進め、小規模大学ならではの丁寧な教育という共通項のもと、各学科の個性が輝く大学づくりが始まっている。

「現代社会学科開設記念号」に寄稿する機会を与えていただいたので、1997年の浦和短期大学福祉科の開設に始まる一連の改組に携わってきた立場から、四半世紀にわたる改組を振り返り、今回の改組の意義を概観しておきたい。

浦和大学の前身である浦和短期大学は、1987年、経営科、英語科の2学科で設立された。開設10年を経るころ、創設者、故九里總一郎先生は、「モノ優先で（略）日本人が「忘れかけた『隣人愛』と助け合う心を思い出させ、いたわりや感謝の心を深く植え付けて参りたい」とお考えになり、福祉の教育への新たな挑戦を決断なさった。<sup>1</sup>そして九里秀一郎総合福祉学部教授を責任者とする新学科開設準備が始まった。「人を支える力を育む」という現在のタグライン、人の文字を据えたロゴマークへと連なる「実学に勤め徳を養う」の新たな時代の幕開けと言える。筆者は、恩師である故一番ヶ瀬康子日本女子大学名誉教授にお声掛けいただいて1995年4月に着任し、九里教授の根気強い、しかし妥協を許さないご指導と黙してのご助力のおかげで、この仕事をやり遂げさせていただいた。

一番ヶ瀬先生は九里秀一郎先生のご依頼を受諾された理由を、「福祉は現代の実学」というご自身のお考えと、九里總一郎先生の実学教育ならびに九里秀一郎先生の教育理念に対する賛同であると話され、10年以上にわたり講義も一部担当しながら定期的に来学されていた。

九里構想は、福祉教育がより実践と関係したものとなるよう、教育研究を実践と結びつける社会福祉法人設立（特別養護老人ホームスマイルハウス）、「緑の福祉ゾーン」と名付けた大学周辺地域のデザインなど、斬新な発想であった。それだけでなく、実習教育をサポート

する実習専門職員を配置した福祉教育センター開設も全国で最初だった、ご自身の設計による広々とした介護実習室（3号館1階）、家政実習室や調理実習室など例のない設備を備えていた。大学設置の抑制例外として福祉系の学部学科の新設が相次ぐ中、単なる学科設置に留まらない先進的な取組が注目され、視察者が続いた。

2003年、大学進学率の伸長、4年制大学進学志向の高まりを背景に、浦和大学が設立された。総合福祉学部の創設にはいくつもの壁があったが、200人定員のところに300人近い入学生を迎え入れてスタートすることができた。

折しも、時代は社会福祉基礎構造改革と規制緩和によって、社会福祉法人以外の経営主体が続々と福祉の世界に参入し始めていた。社会福祉法と介護保険法の施行に始まる21世紀の20年間を総括すれば、社会福祉事業や福祉に関連する各種事業の拡充、その拡充を支える関連法の制定、措置から契約制度への移行による自己責任の拡大、各人の経済力が福祉サービス利用に強く影響する時代の到来ということができよう。社会福祉のある種の変質は批判の対象であるが、社会福祉が一部の困窮者や要援護者対策から、少子高齢化の進捗を支える、まさに総合性のある生活保障の方策へと変容していくために通らなければならない過程でもあった。

続く2007年、総合福祉学部には児童福祉の専門的な教育課程がなかったことや、「保育士」が人気職業であったことなどを背景に、「こども学部こども学科」が創設された。地域と連携して学生を育てるという理念の実現のため、カナダの家族支援の実践に学び、多様性に根差す文化の創造を目指した。

この時「幼児教育」の柱を立てたことが、教育学の領域への展開の基礎となり、2017年、小学校の教員養成を目的とする学校教育学科の設立に至った。こども学部をようやく乳幼児から学童期まで対象を広げた。それだけでなく、「教育学」という新たな機軸への第一歩であったとも言える。2020年度に完成年次を迎えて教員採用試験の結果を待ちながら、学科の今後の発展を願うところである。こども学部の設置及び学校教育学科の設置の経緯や特色については既に述べているので割愛する。<sup>2</sup>

ここまでの改組が常に資格取得を重視し、職業教育の色彩の強い学科設置であった。「学」としての専門性と実務家養成との狭間に置かれ続けるジレンマは、2014年の「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の登場と合わせて、筆者にとっては、今回の社会学部設置業務の原動力にもなっている。

今回の改組、すなわち学部の名称変更と学科新設の焦点は、「福祉の浦和大学」という単科大学のイメージをいわば払拭して、幅広く多様な学生が学ぶ大学へと転換していくことにあったといってよいだろう。

現代社会学科の最大の特徴は教育課程編成とその履修方法である。観光、経営、メディアを「フィールド」という名称で緩やかなグループにすることによって、学生が興味関心や将来の方向に沿って自由に学びを組み立てることができるようにしている。コース制のような明確な境界を設けないため、履修指導のサポートや学生の自主的な学修態度が必要とされる面もあるが、資格取得にとらわれずに成長、成熟していける学び機会を提供できる。また、全学を通じてビジネスシーンで役立つ授業科目を多く配置し、インターンシップに力を入れて、学生が実社会に触れられる機会を設けている。

そしてもう一つの特徴は、教育学の柱を生かして教職課程を開設したことである。中学校一種（社会）、高等学校一種（公民）の教員免許状を取得できるようになり、これにより、大学として、乳幼児から高校生までの保育・教育の柱を整えることができた。

コロナ禍は社会の激動や不安を予感させる。そうであればこそ、いずれの学科においても、現代社会をしっかりと見据えて正しい情報を得て分析、判断していく力を高め、自ら前を向いて学び、多様性の受容と協働を通じて自分らしい人生を掴み取れる実力をつけられる教育が必要とされている。そのことにとって、社会学という学問領域を加えることが、大学全体にとって重要な要になるに違いない。

創設者の言葉に立ち戻れば、「『実学に勤め徳を養う』という理念の中で、特に『徳を養う』という人間性豊かな人材の育成に重点を置きたい」<sup>3</sup>として福祉の教育を歩んだ二十有余年を経て、「徳を養う」教育が一定の成果を上げた。多くの卒業生が福祉、介護、保育の現場で活躍していることが十分にそれを示している。

次の時代、「実学」という態度をどう展開していくか、次世代の方々と共に考え、校訓の新たな体現をめざしていきたい。

これまでの改組と同様、今回も学内外から実にたくさんの方々に並々ならぬお力添えをいただいた。この場を借りて心から御礼申し上げ、本学の更なる発展と、本学の学びを通じて学生が社会へと羽ばたくことを以て、感謝を表したいと思う。

## 註

- 1 九里總一郎 「新たなる挑戦」『教育に愛の灯をともして』朝日新聞出版サービス、1998年3月 pp. 328-330
- 2 大久保秀子「浦和大学こども学部の教育理念と特色－地域社会と連携して総合的キャリア形成をめざす－」浦和論叢第38号、2008年3月 pp. 1-12 ならびに「浦和大学こども学部学校教育学科開設への期待と課題－『混沌』から私らしさを打ち立てられる教師の養成－」浦和論叢第58号、2018年2月 pp.2-12
- 3 九里總一郎 前掲 p.330